



金沢市立中村記念美術館

金沢市本多町3丁目2番29号 〒920-0964
 TEL 076(221)0751 FAX 076(221)0753
 開館時間 午前9時30分～午後5時(受付は午後4時30分まで)
 休館日 開催期間中無休
 入館料 個人一般300円 団体一般250円(20人～) 65歳以上の方200円
 小・中学生・高校生無料
 交通 金沢駅東口10番バス乗場から18系統東部車庫方面行15分、
 本多町下車、徒歩3分 駐車場20台
<http://www.city.kanazawa.ishikawa.jp/bunho/nakamura/>

金沢では、藩政期からの伝統を受け継いで、現在も茶道が盛んに行われ、藩主前田家をはじめとする武家や老舗の商家に所蔵された数々の名品が伝来しています。また、蒔絵・象嵌・友禅・茶陶の大樋焼・宮崎寒雉の茶の湯釜など優れた伝統工芸が継承されています。昔、商家の主人は皆、日頃から謡曲、茶の湯、生花を嗜んだといわれ、また、財産を、土地家屋・資金・美術品とに三等分したといわれます。商家の美術品収集は、茶道具と室内調度(屏風・掛軸・酒器・食器・装飾具など)に大別でき、これらの中には、加賀藩御抱絵師の佐々木泉景・泉玄、蒔絵の五十嵐道甫・清水九兵衛・米田孫六・沢田宗沢、金工の宮崎寒雉・横河九左衛門・山川孝次、大樋焼の大樋長左衛門ら、金沢で活躍した名工の作が多く見られます。このように金沢の美術工芸は、武家や商家の風流に支えられながら継承され発展してきました。

金沢市立中村記念美術館はこのような金沢で、昭和41年、中村酒造株式会社の当時社長であった中村栄俊(1908～1978)の収集品をもとに開館しました。中村家は、明治3年、栄俊の祖父栄助の代に酒造業を始めました。栄助は、日頃から「商人がお茶人や文化人になると必ずその家は衰退する。商人がお茶や文化にうつつをぬかすようになってはいけない」と戒める家業一筋の人であったそうですが、生来、風流に素質があった栄俊は、昭和18年、表千家流の茶道に入門し、茶道具



の収集を始めます。同20年の敗戦は、栄俊が日本の「文化国家としての再建」を願い、金沢に自ら美術館を作る構想を抱く契機となりました。戦後の激動期、名家秘蔵の美術品が次々と市場に出る様を見聞きするごとに「この名品を次代に伝えるのが私達のつとめだ。美術品は一個人のものではない。国民の宝であり、一般に公開せねば...」との信念を強めたといえます。現在、館の代表的所蔵品となっている前田家伝来の重要文化財「古筆手鑑」、加賀藩年寄本多家伝来「蒲生肩衝茶入」や同横山家伝来「利休小肩衝茶入」、重要美術品「青井戸茶碗銘雲井」、同「砧青磁平水指銘青海波」などが戦後数年の間に入手されています。そして、終戦20周年を迎えた同40年、財団法人を設立、中村家の私邸を展示棟として現在の本多公園に移築改装し、翌年、財団法人中村記念館が開館しました。同50年、財団の所蔵品が金沢市に寄贈され、金沢市立中村記念美術館が発足、平成元年、市制100



小槌熨斗押(こづちのしおさえ)

初代 山川孝次 / 明治(19世紀) / 本体長9.5 幅5.2cm

打出小槌をかたどった熨斗押。熨斗押は、正月などのおめでたいときに、蒔絵の遠山台に載せた匏熨斗の上に置いて使う装飾具です。赤銅(しゃくどう)の素地に金象嵌で松竹梅、七宝文、側面に沈線で宝珠を表し、柄の側面に「山川孝次」と銘が刻んであります。黒柿の共箱に収まり、蓋表に金粉字で「小槌熨斗押」、蓋裏に「山川孝次造」と記してあります。箱内に、製作に要した純金、並金、銀、赤銅の量を記した紙片が収まっています。

周年を記念し、本多公園に新館が竣工しました。木造の旧館(旧中村邸)は、昭和3年、栄俊の父二代栄助が建てた切妻造2階建、間口6間、重厚なたたずまいを見せる町家の名建築で、同61年、金沢市指定保存建造物となりました。

館蔵品は、中村家の旧蔵品に金沢市が購入したり寄贈を受けたものが加わり、現在約700点あります。金工の分野では、金沢で活躍した宮崎寒雉の初代(1631～1712)・11代(1843～1915)・12代(1880～1964)・13代(1915～1994)・横河九左衛門(生没年不詳)・村沢代尚(不詳～1843)・村沢国則(生没年不詳)・山川孝次の初代(1828～1882)・2代(1860～1930)・山尾光侶(1862～1923)・米沢弘正(1851～1923)・初代魚住為楽(1886～1964)・米沢弘安(1887～1972)・白山清光(1896～1965)・高橋介州(1905～2004)金沢で現在活躍する人間国宝3代魚住為楽(1937～)・人間国宝中川衛(1947～)・14代宮崎寒雉(1940～)の諸氏をはじめ多



霰棗釜(あらねなつめがま)

初代 宮崎寒雉 / 江戸(17～18世紀) / 口径10.5 胴径17.5 総高21.8cm

棗(なつめ)形の落ち着いた姿に小粒の霰(あらね)装飾が調和し、静かなたたずまいを見せています。口造は輪口、銀付は茄子形、蓋は唐銅一文字蓋。箱の蓋表に「釜屋寒雉」、蓋裏に「紹鷗 / 小霰 / 加州御物之写 / 十之内」と墨書があり、この釜の形が茶人武野紹鷗(じょうおう)の好みで、当時前田家にあった同形の釜を初代宮崎寒雉が写したものと分かります。名器の収集で著名な金沢の山川家に伝来した由緒ある品です。

くの作家の作品を所蔵しています。展示は、春夏秋冬、3ヶ月毎に年4回館蔵品を主に、毎回テーマを設定して開催するほか、旧中村邸では、春秋各9日間、館蔵品を展示して室内を公開する「座敷飾り」、春分の日恒例の「春の市民茶会」などを開催しています。

ご案内

企画展

「春の茶の湯歳時記」

同時開催

「美術工芸で楽しむ 春爛漫」

開催期間 3月4日(土)～5月30日(火)
 利休忌・花見・端午の節句の取合せを中心に茶道具44点。季節の絵画と工芸21点。

「旧中村邸春の座敷飾り」

開催期間 4月8日(土)～4月16日(日)
 旧中村邸の室内に館所蔵の屏風、掛軸を飾り、一般公開します。